

論文博士の学位授与申請に係わる審査報告書

氏名（本籍） 周 群英（中国）
学位の種類 博士（中国研究）
報告番号 乙第32号
学位授与年月日 2020（令和2）年3月20日
学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当
論文題目 月子仪式的功能与变迁研究

審査委員
主査 周星 
副査 松岡 正子 
副査 唐 燕霞 

2020（令和元）年1月23日
愛知大学大学院中国研究科

審査の結果の要旨

本学中国研究科委員会の決定に基づいて、周群英より提出された論文博士の学位授与申請書および参考関連論文等関係資料により、2019年11月7日に予備審査を行った。「大学院博士の学位授与に関する内規」第7条の定めにより、以下の2項目について、審査委員の意見交換を真剣に行った。

(1) 学位申請論文の予備審査および履歴事項、研究歴、業績目録について、十分評価できるとい
う結論に至った。

(2) 外国語についての試問は不要であるという結論に至った。

予備審査の結果、博士學位論文の基本的要件を満たしており、学位授与申請の受理を可とし、本
審査への移行を可とする。

2019年1月9日17:30~18:30、名古屋校舎本館M406教室で、遠隔教学システムを使って、学
位申請論文の本審査を順調に行った。

まず、周群英より、学位申請論文の趣旨、問題意識、先行研究、研究目的、本研究の視点、理論
の枠組み、キーワード、フィールドワーク、研究対象となる地域や村及び施設の概況、依拠した資
料・データ及び論文の構成、本研究の斬新性と問題点などについて、などについて、陳述がなされ
た。次に、審査委員による口頭試問に移り、質疑応答を行った。すべての質問に対し、周群英より
回答や説明がなされ、それらの答弁はいずれも審査委員全員を概ね納得させるものであった。

口頭試問が終了し、周群英が退席した後、引き続き審査委員会において議論を重ね、以下の結論
に至った。

周群英の論文博士學位申請論文は『月子 (yuezi) 儀式的功能與変遷研究』を題とし、中国北京
市郊外のある村落と市内のある施設における産婦たちが経験した「月子儀式」を「通過儀礼」、「機
能主義」、「文化変遷」の視点から、系統的に研究したものである。「月子儀式」とは、産婦が出産
した後、一か月ほど介護や世話を受けながら、身体の回復とともに、様々な儀式を体験し、徐々に
日常生活に復帰する中国の伝統的な人生儀礼の一環であり、女性をめぐる社会的地位、ジェンダー
的文化環境、家族の構造、穢れ意識、生命観などに関係しているのみならず、新生児の誕生儀礼な
どとも絡んでおり、複雑な構成になっている通過儀礼でもある。

周群英論文のメリットは以下の幾つかが挙げられる。

一つ目は、「月子儀式」の、いわば産後介護の普遍性、文化による異なる対応や「月子」に対する認知の偏り（「月子儀式」を「陋習」と見なすこと、中国人しか「月子儀式」を行わないというなど）を指摘したうえで、本研究の問題意識や意義を唱え、先行研究を文化の分野と衛生保健科学の分野によりそれぞれ整理し、本研究の理論的視点をファン・ヘネップの通過儀礼理論やヴィクター・ターナーのリミナリティー理論でよく論述した点にある。そのうえで、「月子儀式」の在り方、構造的特徴、およびその社会的、文化的機能を解明し、21世紀においてもこの伝統的な儀式や習俗が引き続き温存・伝承されているわけや意味を明らかにした。

二つ目は、調査地における数十名のインフォーマントの体験談をそれぞれ年代別に整理し、1970年代—2010年代までの「月子儀式」の実態及びその変化を経験者たちの語りを踏まえて、よく纏めて論じた点である。1970年代の在宅出産や「月子」伝統の順守、1980年代の病院出産の始まりや「月子」をめぐる諸困惑、1990年代の病院出産の普及や「月子儀式」の多様化などのように、異なる時代の「月子儀式」の特徴や時代の変化を背景とした「月子儀式」の変容およびその方向性を克明に描いたのである。経験者たちの語りには身体の苦痛から心理的困惑まで、人情の往来から家族内の葛藤まで、新生児に対する期待から世話人への文句まで、実に多岐にわたって複雑であるが、「月子儀式」に対する姿勢の違いに基づいて、当事者の産婦を保守型、慎重型、逸脱型に分類し、また、産婦を世話する人々を姑による介護、実家による介護、共同介護に分類した。さらに、「月子儀式」の実態のみならず、「月子儀式」をめぐる「過去と現在」、「中国伝統と西洋医学」などの緊張関係を生々しく描いたのである。加えて、「月子儀式」には、産婦の通過儀礼と新生児の誕生儀礼とが含まれるという複雑さを明らかにし、両者の関係性について、前者のプライバシー的な属性と後者のオープン的な属性が対照的であることを論説した点など、多数の鋭い知見は、本テーマの研究に大きく貢献したと言える。

三つ目は、調査地の社会変遷や文化変容に伴う病院出産の普及が産婦の生育理念や「月子」を含む産後介護の民俗に齎した様々な影響を指摘したうえで、「月子儀式」の構造的安定性に注目し、現地の「月子儀式」を臨産の隔離（準備）儀式、産後のリミナリティー（規範やタブーに伴う）儀式、「満月」（「月子」明け、）の統合儀式の三段階に分けて、調査地の「月子儀式」を分析した点である。また、産婦の身分変化は「月子儀式」の過程に連動していること、「月子儀式」は人間関係の維持・構築や社会秩序を「再生産」する機能を持つことなどを明らかにした。

四つ目は、現代都市社会における「月子儀式」の新たな動きを敏感に把握し、自らの体験や北京市内の「月子会所」（産後介護のサービスを提供する施設）での調査を踏まえて、「月子儀式」の実

施される空間の移転や世話人（「月嫂」を雇う）の変化、産婦の意識改革など科学化、産業化（市場化）の新しい動態を視野に収めて、「月子儀式」研究の新境地を開いた点である。また、伝統的な「月子」と科学的「月子」のそれぞれの特徴や両者融合の在り方を整理したことも、本論文の斬新性を示すものである。

五つ目は、調査地となる地域と村落の概況、調査対象となる家政会社、産後介護の施設（「月子会所」）やある病院の産婦人科の概況などをよく把握したうえで、フィールドワークを実施し、参与観察や聞き取り調査などの方法を通して、豊かで、信ぴょう性のある一次資料を大量に獲得した。

また、論文の構成全体は論理的であり、キーワードの説明が明白で、注釈や参考文献なども充実しており、本研究課題の各方面をほぼカバーしていると言える。

周群英論文の問題点として三つのことが指摘される。

一つ目は、著者が「月子儀式」の変容を通して、現代中国の都市社会における家族の新しい形態を「双系家族」の芽生えと位置づけたことについて、斬新な論点とはいえ、「双系家族」という語の定義についての論究がなく、論証はまだ不十分である。「家族の新しい形態」という視点は、本テーマの核心の一つといえる。家族形態の変化、居住形態の変化、父系親族と姻族の関係性の変化、夫婦関係の変化、およびこれらの変化の社会的背景について、農村と都市それぞれに関する一層の調査と考察がのぞまれる。

二つ目は、著者はお産のケガレ及び浄化儀式としての「月子儀式」の属性を正しく指摘したが、この点については事実に基づく理論的分析がやや弱く、さらに深く探索する余地があると思われる。

三つ目は、近代都市における一般女性の「月子儀式」に関する動向調査の必要である。北京市における「月子会所」（産後介護の施設）の出現は富裕層の女性を対象とした新しい動きであるが、韓国など諸外国にも同様の施設があり、新規産業として注目されている。都市民女性は、出身が多様であり、経済水準、学歴、就業状況、同居家族の違いによって、「月子儀式」に対して異なる考え方や行為の諸相が予想される。本論文では一か所のみ調査であるが、より多くの事例調査が必要であろう。

以上を踏まえて、審査委員会においては、全員一致で周群英論文は一部の問題点が認められるものの、全体として愛知大学大学院の博士学院論文諸規定に定められた諸要件を満たしているという結論に至った。

以上